

富岡製糸場の世界史的意義

山 崎 益 吉

An Inquiry into the World Historic Meaning of Tomioka Silk Mill

Masukichi YAMAZAKI

To be resistered to the world heritage, Tomioka Silk Mill have to be inquire it's thought as well as it's size and shape. What is important is confucian philosophy toword western sosity and western capitalism. In this paper I will inquire those problems by studying for Shibusawa Eiichi, Odaka Junchu as well as Wada Ei.

By focusing on the ralationship between Shibusawa,Odaka in Fukaya distric and the Mito school,the relationship between the Chu Hsi school (shusigaku in Japanese), confucian philosophy and Wada in Matushiro fudal clan, I will inquire those problems.

一. 富岡製糸場の近代的意義

富岡製糸場がにわかに脚光を浴びてきた。世界遺産登録に向けて弾みがついて来たからである。暫定リストに掲載された意義は大きい。確かに平泉ショックは隠せないが、それを乗り越えなければリスト入りは叶わない。しかし可能性は非常に高い。なぜならば、近代化産業遺産でこれだけの規模を誇る建物は世界的に見てそう多くはないからである。むしろ富岡製糸場が一頭地を抜いていると見ていい。

私はこれまで海外に出る機会が多く、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアを中心とする西欧諸国を中心に数多くの世界遺産、自然遺産、近代化産業遺産に触れてきた。歴史的遺産、自然的遺産はもとより近代化産業遺産にも多く接してきた。アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) を中心とする古典経済学を研究しているので、例えばイギリスに足繁く通った関係上、イギリスの世界遺産、近代化遺産を多く見て来た。私の世界遺産、自然遺産、近代化遺産探訪の歴史は古い。国連、ユネスコがこうしたリストをつくる以前であるから、当時訪れた世界遺産、自然遺産、近代化産業遺産は、結果的にそう言った言うことである。ドイツではカール・マルクス Karl Marx (1818-1867) の生地トリール (Trier) を数回尋ね、途中ラインの流れを堪能した。コブレンツ (Koblenz) からモーゼル (Mosel) 河畔を上る光景もラインの流れに勝るとも

劣らない。トリアはドイツで最も古い都市の一つである。ポルタニグレ (Porta Nigra) が出迎えてくれる。コブレンツを下ると古代ローマ時代の植民地ケルンに出る。オランダからボンに向かう途中ケルン大聖堂が迎えてくれるが圧巻である。600年以上の歳月をかけて造られたと言われているが流石である。ケルン大聖堂の前ではとてもシャッターは切れない。大きすぎてもいい。イタリアでもよく世界遺産を廻った。イタリアは世界遺産の宝庫である。そう言えば、スイスからベローナ (Verona) に向かう列車の中で、「イタリアには世界の60パーセントもの歴史的遺産がある」と誇らしげにか語ったイタリア人の顔をつい先日のように思い出す。古代ローマの遺跡群、大聖堂は有名である。ギリシャではパルテノン神殿、スペインでは聖家族、フランスではノートルダム寺院、さらに北欧まで足を伸ばし見て廻った。ロシアのエルミターージュもその一つである。

とくに足繁く通ったのはイギリスである。アダム・スミスの経済学を中心とする古典経済学を研究している関係上スコットランドへアダム・スミスの生地をよく尋ねた。ロンドンにはウエストミンスター寺院を初め多くの世界遺産がある。私はイギリスに足を運び入ってから相当時間が経過しているが、イギリスに固有なナショナル・トラストなる組織があるので何回目かに訪れたとき会員になった。会員になるとナショナル・トラストが所有しているすべての資産を無料で見ることが出来、さらに美しい自然、歴史的遺産の保存に協力できるというので会員になった次第である。会員の恩恵によってナショナル・トラスト (The National Trust for the Places of Historic Interest and Natural Beauty) の所有する資産をほとんどジャンル別に北はスコットランドのサッソー (Thurso) から南はロンドンの南ワイト (Wight) 島まで見て回った。

スコットランドの首都エディンバラから列車で一時間のところにカーコデイという人口5万余の都市がある。カーコデイ (Kirkcaldy) もハイストリートは歴史的遺産になってもおかしくはないほど古風な街で往時を偲ばせてくれる。カーコデイに行く途中にフォース (Forth) 湾があり列車走っている。初めて訪れたときフォース湾を何で横切るのがかと疑問を抱いていたが、現地に来て長い陸橋によって渡ることが出来るようになっていたことを知って納得した。実は、このフォース湾にかかっている陸橋が近代化産業遺産になっている。もう一つ紹介しておこう。私は1991年から1992年にかけて文部省の在外研究員としてロンドン大学で研究生生活を送ったことがある。この時ロンドンの西部、イーリングブロードウェイ (Ealing Broadway) に住んでいた。ここは西に向かう列車の起点パディントン (Paddington) 駅から15分の所にある。ロンドン大学からの帰り道よくパディントン駅を利用した。普通はピカデリーライン (Piccadilly line) で帰るのだが、この線はアクトントン (Acton Town) で乗り換えなければならないので、よく利用した。ラッセルスクエア (Russell square) からピカデリー経由でパディントンまで行き、イーリングブロードウェイまで列車で通ったわけである。なぜならば、イーリングコモン (Ealing Common) で降りなければならず、そこから1キロ以上歩かなければならないためパディントン駅をよく利用した。実はその当時この駅が近代化産業遺産とは知らずにいた。無理もないことで、ユネスコがこうした遺産を手がける前のことであるからである。利用していた当時、鉄筋づくりの駅舎であることはうすうす感じていたが当時としては知るよしもなかった。イギリスの駅は荘厳に出来ている。キングスクロス K (King's Cross), ビクトリア (Victoria), チャリングクロス (Charing Cross), セントパンクラス (St. Pancras) などの駅は皆荘厳である。

ところが、ここパディントン駅は鉄筋で被われている。その代わり駅舎は明るくするためにそうした造りになっている。

実はこの二つの近代化遺産ともビデオに収まっている。フォース湾にかかる陸橋は、足繁く通ったスミス生誕の地カーコデイに行く途中であるからまるまるビデオに収めている。長い橋なのでエディンバラ駅を出発する直後から時折車外を収めていたが、ここフォース湾に架かる橋は長いのでまるまる収めなかったからである。もう一つのパディントン駅は、親友浅香百太郎氏が私のロンドン大学留学中にやってきて、イーリングブロードウェイからパディントンの車窓ならびに駅舎をビデオに収めてくれたものである。浅香氏は私を追いかけながら撮っていてくれる途中パディントン駅の外観を収めていたのである。こんなわけで偶然にも私は近代化産業遺産に登録される以前から現地を体験していたことになる。

この二つの事例は、まさに近代化産業遺産そのもの、イギリスの経済の担い手になった。ビクトリア時代を代表する遺産であり産業の推進役を果たした。そういう意味で近代化産業遺産に登録されてもおかしくはない。規模から言えば、アイアンブリッジ (Ironbridge) は見劣りがするが、とにかく産業革命期の先駆けをなしたという意味において特筆すべきであるというのがユネスコの評価であろう。だとすれば、富岡製糸場は日本の近代化産業遺産としてもっとも相応しいのではなかろうか。フォースブリッジ (Forth Bridge) やパディントン駅舎は性質が異なるので、富岡と類似したニューラナーク (New Lanark) の紡績工場を上げればよく分かる。ニューラナークもグラスゴー (Glasgow) へ足繁く通ったので直ぐ側をよく通った。ここはユートピア (Utopia) を実践した工場である。ロバートオーエン (Robert Owen, 1771-1858) 率いる労働者の楽園を建設するために建てられた。クライド (Clyde) 河畔にかかるこの工場はロバートオーエン率いる労働者の楽園として建設され、社会主義思想に基づく搾取なき工場を目指した。産業革命の負の遺産である厳しい労働条件からの解放によるまさにユートピアであった。グラスゴーへ足繁く通ったおりスミスが学びかつ教鞭をとったグラスゴー大学からクライド川を見下ろし、クライド河畔をよく散策した。ニューラナークの紡績工場はこのクライド川の下流に建設されている。規模や中身から見ても富岡製糸場の方が古さという点を除けば近代化遺産への登録の道はそう遠くないように思える。とすれば、思想に因るのか。理想郷を追求したオーエンらの資本主義に対抗した労働者解放のための工場としての歴史的価値にあるのか。確かにマルクス (Karl Marx, 1818-1883) が分析するようにイギリスの労働条件は過酷を極めた。とくに、『資本論』で描写する少年の過酷な労働、16時間にも及ぶ一般労働者の労働時間は本源的蓄積のために避けて通れなかった。労働者解放という思想的側面が確かにニューラナークの遺産にはある。そうしたことが評価の対象に入っているとすれば、富岡製糸場の場合も渋沢や尾高の儒教を基調とする近代化産業遺産への取り組みも考慮の対象となっていであろう。

さらに、和田英 (1857-1929) の『富岡日記』に見られる儒教を基調して取り組んだ思想も考慮する必要があるのかもしれない。

だが、ここでこういう議論は相応しくないのかもしれない。なぜならば、富岡製糸場を含めた世界遺産への登録準備はすでに骨格が決まっている。富岡製糸場と近代化絹遺産群として市、県、国はそうした視点で運動を展開しているからである。本稿ではそうした前提には賛成であ

り、運動を展開していかなければならぬと考えている。そこで、そうしたことを十分承知の上で、当時日本が近代化を図るにあたって西洋列強に示した危機意識の中に実は西洋に勝るとも劣らない精神が存在したことを示したいと考えるからである。富岡製糸場には設立当初西洋芸術に対抗すべきいやそれを包摂する東洋道徳があったということを忘れてはならないなということである。この点に、



渋沢栄一の生家

富岡製糸場の世界的位置づけ意義を見いだすことは世界遺産、自然遺産、近代化産業遺産などを見る場合重要であるというのが本稿を起こした理由でもある。

ここでもう一つ富岡製糸場を見る意味で重要な視点を列挙しておこう。それは、渋沢栄一、尾高惇忠の古里を尋ねたところ、深谷の解説委員が渋沢の生家の前で富岡製糸場に行ったところ、解説委員は建物の大きさがどのくらいで、工女が何人で、釜数がいくつでという風に、外観ばかり解説し肝心の渋沢や尾高のことに少しも触れてくれない。深谷の人達の不満ここにあるというのである。富岡から来たのであれば、帰ってその事を言っておきたい。そう言われてみると確かにそうである。

富岡製糸場建設にあたって忘れることが出来ない人物は渋沢、尾高であるからある。その時私はこれは片手落ちであると思い、「富岡製糸場を愛する会」でその事を報告したところ、その通りであるというので思想的なよりどころを一度整理しておく必要があると考え、本稿執筆のきっかけとなったという次第である。

以前、私は富岡製糸場に勤めた工女を題材とした書物を出版している¹⁾。世界的視野に立って論じたつもりであるが、渋沢、尾高に対する思想的アプローチが今ひとつ稀薄であった点是否めない。日本経済思想史で渋沢栄一の経済思想、『論語と算盤』を題材に講義し、それゆえ渋沢の生まれ故郷深谷へは何度も足を運んでビデオにおさめ講義してきたが、渋沢、尾高の関係、例えばここ血洗島界限が後期水戸学と深い関係にあるところまで追求しないままだった。この点怠慢の誹りは免れない。横井小楠を研究し「水毒」に何度も出会っているのにである²⁾。尾高、渋沢が後期水戸学と深い関係にあったことも触れるじまいであった。これでは富岡製糸場の真相に迫ることは出来ないと思うようになったのは、「富岡製糸場を愛する会」の顧問に就任してからである。顧問という重要な立場に立って富岡製糸場について思想的位置づけをきちんとやっておかないとその役目を果たせないと考え、改めて渋沢、尾高に再度アプローチしたという次第である。この点については本論で詳論したい。もう一つ和田英と『富岡日記』についても深谷（渋沢栄一旧宅）での不満は残る。ところが英の『富岡日記』を何度も読み直して見た結果、その根底に英の並々ならぬ富岡への思い入れの背景には、実は徳川に対する怨念めいたものが富国強兵の原点、富岡製糸場における英の熱意となっているということが分かったからである。この点についても詳論したい。

二. 尾高・渋沢の真意

昨年(平成19年12月13日)日本絹の里が(群馬県高崎市群馬町)「絹の里大学」を開校し、その講座で私は二講座を担当した。一つは「富岡製糸場の世界的意義」、他は「和田英と『富岡日記』」である。なぜ、二講座を選択したかという世界遺産登録に向けてこうした手続きが是非必要であると考えたからである。物事には周知のように形と中身がある。さらに言えば、作用因 (causa efficiencie) ならびに目的因 (causa finalis) である。この要因を満たして目的が達成されると考えているからである。形相因 (causa formilis) ではなく質料因 (causa materialis) を示したかったわけである。形相因は形、大ききで事足りる。しかし富岡製糸場が世界遺産に登録されるためには質料因が是非とも必要であると考えたからに外ならない。質料因は思想的根拠と言ってもいい。さらに作用因、目的因は行政当局、「富岡製糸場を愛する会」などが担当しているので、重要な視点は何と言っても質料因である。だが、質料因をきちんと位置づけるには相当の時間と努力が必要である。富岡製糸場によって立つ根拠が質料因に相当しようからここをきちんと押さえておく必要があるからである。こうして私の富岡製糸場への根拠、質料因究明が本格的に始まった。横井小楠と日本の近代化を何年も追求してきているので方向性は見えている。それゆえ、初めからやり直すということよりも容易である。横井小楠(1809-1869)の「堯舜孔子の道、西洋器械の術」などはそのまま当てはまる。渋沢や尾高が後期水戸学に因るところが大事であるという点も、横井小楠が水戸学に心酔していたことを考えればこちらの方もそうあわてず資料探しをしなくてもすむ。横井小楠は藤田東湖(1806-1855)と肝胆相照らす仲であったが、海外情勢の判断をめぐって後期水戸学と離れる。「水毒」とまで厳しい批判をやったのけるようになる。ここまで来れば藤田幽谷(1774-1826)、藤田東湖、会沢正志斎(1782-1863)などは後方に退く。いつまでも後期水戸学に拘ってはいるわけにはいかないからである。渋沢や尾高も水戸学に影響されるが、根っからの水戸学ではない。正名論は受けいれつつも攘夷にはついていけないというのが本音であろう。会沢の神州論には



中瀬河岸(天明7年)に建つ道標
左 日光・右 江戸の文字が見える

同意できないからである。正名論は尊王論として渋沢や尾高の中に生き続ける。だから、富岡製糸場でその点が活かされることになる。尾高様という工女の呼び名がこの事を端的に表していると考えていいであろうし、また「工女は兵士に勝る」という尾高のメッセージもここにあると見ていい。たしかに、尾高は父に連れられて水戸学の演習を見て感嘆するがそれは幼少のころのことである。正名論、尊王論までは容認しようとも攘夷論にはついて行けまい。天狗党などの攘夷論とは一線を画さなければならない。尾高や渋沢の儒教論は埼玉北部という立地条件に育まれた実践を重んじる儒教であると言われている。江戸や水戸とちょうどよい距離にあり近くも遠くもないという立場が幸いして儒教解釈がより実践的であったと見ていい。教条的ではないのである。深谷学とでも言っているのかもしれない。渋沢の生家が半農半商という立場におかれていたことも影響していたのかもしれない。

江戸や水戸に近からず遠からずという点がこの地域に学問をもたらしたと考えていいであろう。江戸の儒者が頻繁に出入りし渋沢宗助が塾を開き、この地に独特の儒学が花開いたと考えてもいいであろう。その一つに中瀬河岸がある。中瀬河岸は当時の状況を今に伝えている。往時には100艘の船が行き交ったと言われている。ここまでは比較的大型な船が出入りした。上って倉賀野河岸がある。倉賀野までは船が行き交ったがここまでは大型船というわけにはいず、ここからは先は陸路によった。塩尻はその名残である。だがここ中瀬河岸は違う。大型船が可能であり河岸の左は日光、右は江戸の石碑が往時の状況を偲ばせてくれている。ここに江戸の儒者が出入り、実践的な儒学が育ったとしても不思議ではない。菊池菊城、渋沢宗助、渋沢仁山、三浦無窮らが活躍、その薫陶を栄一、惇忠らは受け埼玉北部に水戸学が成立するが、後期水戸学とは一線を画す。何よりも実践的であり、正名論に忠実であったことは富岡製糸場の初代工場長として相応しいと考えていいであろう。その尾高は塾に陽明学を認めているが、実践を重んじてのことであると考えていい。陽明学は朱子学の正名論に批判的であるが、どうしても「性命道理」の学では物足りない側面が出るからであろう。⁴⁾ 中江藤樹(1608-1648)や熊沢蕃山(1619-1691)はともかくも、横井小楠も陽明学的と言われたではないか。だから実践を重



誠之堂

んじたのである。だが、工女に接した精神は儒教の誠であった。工場長室に「至誠如神」⁶⁾を掲げていたことを考えれば尾高がいかに正当な儒教から発せられているか屋を重ねる必要はない。渋沢については『論語と算盤』が物語っているようにこちらも『論語』の現代的な解釈によって実践を重んじる。尾高の方は正名論に忠実であるが後期水戸学からは一線を画している。どちらも江戸の影響を受け、また水戸の影響を受けてはいるが実践を

重んじているということから思弁的にならずまた狂信的にならずにすんだと言っていいであろう。尾高は交易は戦争であるという表現を使い、ややもすると攘夷的思想の持ち主の面影を止めていると思われがちであるが、ここ富岡製糸場に限ってはそうした言動は見られない。西洋技術の導入にあたって攘夷論を唱えていたのでは富国などは及びもつかないからである。生粋の水戸学の流れをくむ内藤聡叟とは異なる。内藤は後に東京大学の教授となるが、明治20年になっても攘夷論を捨てることはなかった。藤田東湖や会沢安を尊敬していた内藤は西洋学を輸入することが日本の国体を損なうと見ていたため渋沢や尾高とは一線を画す立場にいた。聡叟の立場は尾高や渋沢と同じ水戸学として出発するもまさに逆な立場に立つ。この立場はどこから来るのだろうか。やはり実践から来ると見ていい。実践とは富岡製糸場で富国強兵の一翼を担っていたという事からも窺える。聡叟はそのまま維新後も攘夷論をとりつ続けていた。それは思惟の論理以外の何物でもなく、実在の論理の欠如から来るものであろう。品質のよい糸をとって外貨を稼ぐための工女を全国に配置する目的として建設された富岡製糸場において攘夷論など言い出せるわけがないからである。聡叟と尾高や渋沢の立場がここにある。片や観念的で依然として攘夷論を引きずっている。片や実践的、海外に打って出る合本主義や良質の

糸をとることは至上命令の尾高とは同じ水戸学と言っても大きな差が生じるのは致し方ないであろう。⁷⁾

ここまで見てくると尾高、渋沢の考えがどういうものであるかがおおよそ見当がつく。若かりしころは高崎上乘取りに参画しようとしたり、横浜打ち入りに賛意を示していたが、それは若かりしころの後期水戸学への熱病的なものであったと考えていいであろう。しかし、尊皇論を維持するも攘夷論を捨てる結果となったのはやはり渋沢の場合海外の事情に精通し、海外の経済発展を目の当たりにしてきたことが大いに影響している。これは尾高にも当てはまる。尾高は正名論には忠実である。これは儒教から来るものであろう。儒教は仁義礼知信を説く。人間が生まれながらにして持っている「本然の性」がこれである。儒教はとくに新儒教、朱子学は修己治人を説く。つまり上に立つ物が限りなく己を修める、そしてその明德によって影響及ぼしていこうとするところに朱子学、儒教のもっとも大きな特色がある。己を修められないでどうして天下国家を治めることが出来ようかというのが朱子学の教えである。その出発に誠意正心を置く。修身の前提が誠意正心である。さらに、客観的には格物致知で補っている。修身の前に誠意があり、齊家が続ぎ、その後治国、平天下が続く。修身以前が修己で後が治人ということになる。これは朱子学、陽明学でも同じである。儒教でくることが出来る。いわば人間学である。尾高が富岡製糸場で実践したのが「修己治人」である。尾高は血洗島で人望があった。だから所長室に至誠を掲げた。至誠天に通じるを実践したわけである。この精神で工場長として工女の模範としてして業務にあったと見るべきであろう。尾高様と慕われたのはそれが為である。⁸⁾

三. 『富岡日記』の真意

明治維新の大事業が形の上で整ったとはいえ、近代日本の行く末に西洋列強の影がついてまわっていたことに変わりはない。近代化した日本を西欧に勝るともおとらない強国にするためには、いかなる道があるか。あるとすればいかなる道か。いかに西洋に追いつき追い越すことが可能なのか。維新回天の最大の課題がこれであった。幕末から維新时期にかけ、世界的な視野に立った人たちのなかには、早くもそのことに気づいた人が何人かいた。例えば、直接海外に出かけ西洋の人達や文物、制度に直接触れ近代化の道を説いた人、さらに直接西洋に出かけなくとも漢記された書物をとおして西洋の実態を知った人など、形態はさまざまであるが、世界に門戸を開いて広く交易することによって力をつけていく必要があると説いた点では、同じ視点に立っていたと見ていいであろう。広く海外から日本を見つめ直すという視点は、維新以降ももち越された。経済的に強化していかなければならないという点では、維新前も維新後もないからである。政治形態は変わったとしても封建的な農村風景が一変したわけではない。依然として農業国であったから、いかに農業国から工業国へ移行しなければならないかが当面の課題であった。

徳川の末期からこの事は各藩で試みられていた。ここ松代でも例外ではなかった。和田英の母きよに兄がいた。きよは兄九郎左衛門の急死によって婿をむかえる。九郎左衛門、きよの父

横田機応は相手に横田家と釣り合いが取れないと誇示する数馬を婿として迎える。この数馬ときよの間に生まれたのが英である。英には外に9人の兄弟姉妹がいる。長女が寿子で西条村、東条村両学校の裁縫教師、松代婦人協会、愛国婦人会の監事を務めるなどの活躍をしている。次女が英。すぐ下に秀雄がいる。秀雄は大審委員長まで上り詰めた。その下が謙治郎金で衆議委員を務めている。三女は夭逝し、四女つや、五女こときと続き、三男俊夫は大邸地方院長を務めた。四男が信夫である。当時としては珍しくない兄弟姉妹であるが、この兄弟姉妹は頭脳明晰のみならず精神構造も儒学の素養を身につけた人達であった。兄弟姉妹が多いという点では、横井小楠の弟子であるや矢島源助も横田家とよく似ている。徳富蘆花が『竹崎順子』の名で紹介しているが横井小楠は源助の妹をつせをもらい受けている。弟子を兄と呼ぶ関係が出来たが矢島家は一人多い10人である。日本の女子教育に貢献した矢島家は横田家とよく似ている。付け加えておくと秀雄の子供に正俊がいるが彼は最高裁長官になっている。その正俊が英について厳しい人であったと言っている。よく畳みを叩いて説教する伯母さんであると述懐しているが、これは英がきよから受けた儒教を中心とする母の躰であったと見る事が出来る。正俊は伯母英の教育について次のように述懐している。「伯母さんが激しくしかられるときは目に涙を浮かべ『そのようなことをして、ご先祖様にすまぬとはおもはぬかと畳みを叩かれることから和田話の伯母さんのことを悪いことをすると畳みをたたいてお叱る伯母さん』などと陰口きいたものです」⁹⁾ここで英の血筋、教育方針について周辺のことについても触れておきたい。秀雄の長男正俊は昭和48年『富岡日記』に寄せ横田の家風、英やきよについて思い出を語っているが、横田家では厳しい教育に体罰も厭わなかったと述懐している¹⁰⁾。これは横田家の伝統であるが英は嫁に行った和田家も実践したようである。英には子供がなかったので、英の直ぐ下の妹つやの子一輔を養子に迎えている。一輔は英の夫盛治の一字をもらっても盛一と改名。英はこの盛一に対しても真の子供として厳しく躰たようである。後に盛一は養子であることを知って随分悩んだと言われるが、それは厳しい教育方針に対する英の教育方針に従わなかった事に対する負い目があったのではないか、その盛一は東京大学工学部を卒業し古川工業に入社、親孝行をした、と正俊は述べている¹¹⁾。これに較べ本家の横田の厳しい教育方針は正俊に言わせれば面倒なこともなくおとなしく育った。英はそうした横田家の教育方針を横田の子供は行儀がよいと評価していたというのであるから不思議なものである。厳しく育て英は和田家に嫁ぎ、きよの躰を実践し本家の横田の伝統は優しさにかわって行く。横田の伝統は正俊に言わせれば教育関係に受け継がれていく。正俊の妹千鶴子は外交官に嫁ぎ、弟俊雄は弁護士、明俊はNHK勤務、保俊は法学校講師、光俊労働法学者と教育関係に優れた人材を送っている。横田家の伝統はきよの躰のなせる成果であると言ってもいい。

英はよほど聡明な人であったと見える。原題『富岡日記』は、「明治六、七年松代身工女入場中の略記（明治四一年一二月一七日）、明治七年七月より一二月まで「第日本帝国国民間蒸気器械の元祖六工社創立第一年の巻、



旧 横田家

製糸業の記」(明治四一年一月二七日), ならびに「明治八年一月横浜において大日本蒸汽器械の元祖六工社初売込」(大正二年一月二五日)である。もともと人に見せるために書いたものではない。おそらく六工社の要請によって認めたものであろう。それにしても英の記憶力には驚かされる。大正二年一二月二五日の英の日記の写しには、「富岡製糸場の御名をあげたいと日夜念じております」と結んでいる。大正二年といえば英が明治六年, 七年糸取りとして働いていたときから数えて四十年近くも前のことである。よくもここまで確かに記憶していたものだと感心するばかりである。それも名前も日付も仕草も雰囲気もそのまま伝えているから驚きという外はない。私を読み通してただ一カ所の記憶違いを見いだしたにすぎない。松代を発つて三泊四日の旅のすえ富岡に入ると認めているが, 勘違いは横川を過ぎて安中を左に折れるという件だけである。¹²⁾ 力持ちの看板は今だに英の時代と同様受け継がれている。

横田九郎左衛門(1825-1852)に纏わる横田の悲劇に移ろう。富国強兵は殖産興業と共に近代日本のスローガンとなった。西洋列強に負けない国力をつけるためには国富を積み重ねなければならない。幕末から維新にかけてとくにペリー来航後はそうした国家的独立が急務になった。これは藩レベルでも同じであった。秘かに幕府の目をかいくぐって藩富を築く必要があった。ここ松代でも例外ではない。そこで横田九郎左衛門は松代藩を豊かにする



旧 横田家の居間

ために奔走する。音物を送り藩や幕府に陳情し千曲川と越後の大滝を結び目途がつき, ようやく富国への道が開けるようになった。これより先九郎左衛門は仲間とともに経済的に豊かな藩を全国的に視察, 豊かな藩は皆港を持っているとの結論を得, 松代にも港をとの念を持って千曲川と越後の大滝を結ぶ計画を実行に移す。松代の大豆と越後からの魚を交換し土地の生産をあげる計画を立て, 開通が本格化する段になって幕府から差し止めが下った。これに横田家は相当参ったようである。相当な資金をつぎ込んでの上であるから, 横田家の痛手は計り知れない。後に正俊は横田家の貧乏と述懐しているが, この時の出費が原因であった事は先ず間違いない。¹⁴⁾ 横田家は格式は相当高い方であったから養子をもらうにも持参金付きでお願いがでるほどであった。数馬は横田家の三分の一程度の格式であったと言われていたから裕福な家柄であった。横田の家が残されているが一千坪もある屋敷を見ると相当裕福であったかが窺える。その横田家が横田の貧乏となってしまったのは大滝一条があったからである。嫡子九郎左衛門はもし大滝一条が成功すれば藩の英雄になるところであった。それが徳川の一方的な差し止めによって奈落の底に落とされてしまった。英が徳川を恨んだと強調しているのも頷ける。横井小楠が『国是三論』で強調しているように「徳川一家の便利私営に心がけるだけで絶えて天下の万民を安んじることにはなかつた」¹⁵⁾ と言っているが, まさに英にとっては徳川が親の敵となった。そこで九郎左衛門は急遽学問で身を立てることに江戸留学を実行する。父機応の強い薦めもあって林家に入門し, そこで頭角を現し将来を囑望されるまでに成長する。横田の軍学はうまいものであると言わしめるまでにになった。ところが好事魔お多しの譬えではないが, 九郎左衛

門は風邪をこじらせこれが元で帰らぬ人となってしまう。機応の落胆は想像してあまりあるものがあつた。そこで急遽横田家は数馬を婿として迎える。この数馬きよとの間に生まれたのが英である。英が横田家の悲劇として特別に『富岡後記』に挿入したのはいかにこの一件が英に強い影響を与えているかを物語る。是非読んで欲しいと強調していることを考えると九郎左衛門の一件がどれほど影響し、そしてこの事が英の原動力になっていることが分かる。九郎左衛門の富国強兵が元でこの私まで勇気を与えてくれると英が強調するのは、九郎左衛門の一件が横田家の悲劇であつたかが分かるというものである。

富岡での尾高の富国強兵と大滝一条の富国強兵が異次元の世界で結びつけられる。松代での富国強兵は怨みの強兵である。だが尾高の強兵論は誇りの強兵である。松代での富国強兵が次元を超えて一介の工女英をして世界的視野を持って語られるのはこれがためであろう。英がかたくなに大里に対して蒸気蒸しの糸に拘るのも松代での富国強兵が裏目に出たからではなからうか。「繰婦勝兵士」という尾高の揮毫を六工社に掲げ糸をとったのも徳川と異なった次元で松代を豊かさに導いて行く必要があると考えたからに他ならない。英のこの経験が『富岡日記』のベースになっていることを肝に命じる必要がある。『富岡日記』はそこまで読み取ることによって英が何を目標したかが見えてくる。英には維新回天後の動向が見えていたのかもしれない。その事は二つの富国強兵論によって頷ける。二つの富国強兵は晩年大正年間に認めたものであるが、九郎左衛門の一件が強く焼き付いていた。それが富岡行き決意させ、六工社への厳しい注文となっていると考えていい。そこでその事を念頭に、その後の英の意志を代弁して近代日本の生き方を示しておこう。おそらく英がそう考えたに違いないという視点である。

四. 東洋道徳・西洋芸術

横井小楠の原案とされる「五箇条のご誓文」に見る「知識を広く世界に求める」ことは、西洋列強のあり方、生き方を学ぶことでもあつた。形の上では独立国であるが、西洋の植民地、半植民地化の脅威が関税自主権、治外法権の欠如の下では西洋の脅威が完全に消えたわけではない。依然として、西洋列強の影に怯えていたことに変わりない。西洋諸国の脅威に晒されるという恐怖から完全に解放されたわけではなかつた。この脅威から解放されるためには、国家的独立を達成し、西洋列強に伍していくだけの国力がどうしても必要であつた。もちろん、国家的独立の基本は強力な経済力を準備することであり、是が非でも必要であつた。では、国家的独立を図り、それを担保する力強い経済力はこれをどう準備していったらいいか。英には徳川による苦い経験がある。大滝の一件が頭から離れることはなかつた。徳川一家の便利私営のための富国強兵であつてはならなかつたのである。手本は西洋列強諸国にあつた。尾高の言う富国強兵論であつた。なぜ、イギリスは強大な国になりえたか。もし、イギリスのようになりたければイギリスがやったようにすればよい。単純な西洋列強模倣論は早くも19世紀にはいるや、本多利明（1743-1820）のような重商主義者によって提唱されたが、かれが強調するのは単純なる地理的模倣論であつて、例えば、首都をロンドンと同じ北海道に移せばいいというものであつた。いずれにせよ産業革命をいち早く終えたイギリスのような国づくが模範であつた



旧 横田家の床の間

ことに変りはない。

イギリスが強大になりえたのは繊維産業を興したからである。だとすれば、日本も繊維から近代化を強力に進めればよいというのが、当時の近代化論の骨子であった。そのために繊維による近代化が計られることになったのが、富国策である。だが、これにはもう一つのスローガンが付随することになる。強兵である。

本来ならば、国家的独立を勝ち取るためには経済的独立でいいはずである。強兵を掲げたところに日本の悲劇があったわけであるが、殖産興業だけでは国家的独立が覚えないと考えたからに他ならない。ともあれ、富国策が取られることになった。それも国家の威信を掲げての殖産興業、繊維政策であるから、短期間のうち外貨獲得が急がねばならなかった。上毛カルタにも詠われているように、「日本で最初の富岡製糸」はこうした国家的戦略のもとに誕生する。富岡製糸場は国家的戦略のもと突貫工事によって、フランスの技術を導入して誕生したわけである。このことは裏を返せば、それだけ近代化が急がれたからである。

和田英が富岡にやってきたのはこの頃である。まだ年若き二十歳前、今で言えば、高校生である。士族の娘として成長した英は、儒教よる厳格な家庭に育ち、国家的戦略を一身に背負って、おそらく国の将来を担う覚悟で長野松代からやって来た事は九郎左右衛門の一件によって領ける。17歳になったばかりの乙女が工女として、富岡模範製糸場にやって来たその決意こそが、当時の国際環境の厳しさを物語るものとして、特質大書しているが、横田の悲劇と富国強兵があったればこそである。英が富岡でどう振舞ったか、また、富岡を退いてから松代に帰ってから六工社でどう振舞ったかをとおして、独立をいかに図っていかなければならなかったかを考えてみたい。と同時に、西洋技術にたいする「東洋道徳」の葛藤も当然問題になるが、松代における佐久間象山の世界観をも視野に入れ、英がどういエートスで行動したのかは『富岡日記』のなかに散見される。

この点については各方面で語られているので、松代に帰った英が民間会社、大里忠一郎(1835-1898)らの創業による六工社での富岡仕込みを見ればよい。富岡仕込みは強烈である。社長までがたじたじになるのであるから相当なものである。富岡時代は模範生として全国に展開するための伝習所であった。だが、これからは民間会社として良質な糸を取って外貨を稼がなければならない。英らの技術が試されることになる。それだけに英は真剣である。工女と社長の仲介役まで買って出る。ここまで来ると誰が社長か分からなくなる。富岡仕込みを英は「富岡風」と呼んだ。よほど自信があったのであろうと思うと同時に尾高への思いが伝わってくる。「富岡風」とは何か。英は「富岡風」とは原理、原則に忠実に糸を取ることであり、と強調する。当時、粗製乱造によって輸出に耐えられるような生糸が製造されず、国際的に評価が低かった。官営富岡製糸場が建設された理由もここにある。明治2年4月には「今日の急務は、わが国固有の産物を務めて増息せしめ、且其品位を佳好ならしめ外国製品に卓絶する様にし、粗悪の品造り出す事無専一とすべき」(『蚕種説』)と説き、さらに「生糸は、諸国の出品にこれあり、

ことに伊太利のものもっともよしといふ、……わが国の生糸も、其の性質よからぬあらねども、製法よろしかぬ故に、其の売価は大いに下れり」（『論告書』）と強調されていた。それゆえ、富岡シルクが国際的に第一級にならねばならなかったわけである。英が富岡仕込みによる第一級の生糸に拘る理由がここにある。松代に帰った英はこう回顧している。「五十人がまに一人ずつ、一人は一時間後とに交代。一釜を三人で代わる代わる糸を取って居ます。男女二人二十五釜の前に行きまして、糸のむらになりませんように見て歩きまして、太過ぎても細すぎても切れてしまいます。湯かげん、しけの出し方、蛹の出し方等やかましく申されます。それで聞きませんと叱られます。その上西洋人が見廻りしまして、目にとまりますと中に厳しく申します。これは直ちに工女中の評判になりますから、如何なる者も恥ずかしく思いますように見受けます。実に規則正しいもので、あれでなければ真の良品は製されぬかと思ひます。私か後年に至りましてもともかく富岡風で通しました」¹⁷⁾。

「富岡風」といへども、明治6年2月の国際博覧会では一等になれなかった。富岡シルクは二等に甘んじなければならなかったから、早く一等になる必要があった。英が松代で目指したのは、国際的に通用する第一等の生糸であった。松代に帰った英一行を待っていたのは、英らの期待とは裏腹に技術力の大きな落差である。富岡製糸場は国際水準を備える装備であったが、松代では民間資本によるから資金の面においても比較にならなかった。とはいえ、国家の威信にかけて「富岡風」は通さなければならなかった。技術力において六工社と富岡とでは「天と地」ほどの差があった。技術力もさることながら原料である繭の質も良くない。天日干しで小粒である。だから、繭に重みがなく糸口が細くべたべた指につき取れない、と英は嘆くほどであったが、英が偉かったのは不平を言う前に、そうした条件でも良質の糸を取るよう懸命に努力した点である。不器用であったと自ら述懐する英は、きよが九郎左衛門の一件で神への期待をかけなくなったが、英は逆に神への期待を膨らませている。誰にも見られないうちに願をかけた。真の富国のために願をかけ努力した。「繭が悪い、機械の具合が悪い、蒸気がたたぬ」¹⁸⁾などを比べたらそれこそ糸は取れない。英には国のためという大きな使命があったからである。

六工社は私企業であるから「富岡風」というわけにはいかなかった。なぜならば、利潤を上げなければやっていけなから、利潤を度外視した「富岡風」というわけにはいかない。良質な糸を取るという英らの目的と採算が合わなければやっていけないという大里社長との対立も、基本的には利潤をめぐる葛藤となる。そのことは早くも現れた。理想と現実の葛藤である。国際的にも通用する第一等の糸を取らなければご先祖様に申し訳ない、国家にも顔向けできないという英らの価値観と、何はともあれ会社が存続するためには利潤を度外視してはなにものならないという現実路線の対立である。この路線は当時日本が置かれた立場をそのまま表していると見ていい。国家の要請をうけて模範工場で世界的な水準の技術による糸取りと一介の民間企業とでは、技術力、原材料の差はどうすることも出来ない。理想と現実の問題が早くも大里との対立として表面化する。その対立点は、繭を煮てとるか蒸して取るかに絞られた。煮て取ると品質は劣るが目方は出る。そうすれば当面の利益はあげられる。大里には国家的基準などは関係ない。当面利益をあげ企業の存続を図らなければならないから、国際基準などどうでもよいことである。だが、英らはそうはいかない。「富岡風」を実践しなければ何のために富岡へ行ったか意味がないから、大里に抵抗する。英らに言われても大里としてはどうしようもな

い。英らは「富岡風」でいくとあくまでも強調する。会社側は「富岡風」が頑張っているから目が出ないと言い張る。六工社は賃引きをも行っているから頼まれれば要求に応えなくてはならないという弱みがあった。煮て取る方が目が出るから依頼者に答える必要もあったのである。¹⁹⁾しかしこれでは国家的独立をはかる西洋技術にまけてしまう。英には東洋道徳がこれを許さなかったと見るべきであろう。

英らはもし煮て取るようであれば、それはとても国際水準に勝てないからそうした方法では仕事が出来ない、こんな所にいられるものかと強気の姿勢で臨む。英らは蒸気取りと練り糸と一緒にされたら困る、と言い張る。大里の基準と国際基準の葛藤である。そこで、英は打開策として一つの提案をする。煮て取った糸と蒸して取った糸とどちらが評価されるか、横浜へ行って評価してもらおうというのである。もし、煮て取った糸が評価されるならば私たちはそれに従いますが、蒸気取りが評価されるならばそれに従って欲しいという提案である。結果的には、蒸気取り糸が評価され、蒸気取りが選択されることになる。大里は「実に知らないは恐ろしいことで、あんなことを申して面目ない」²⁰⁾述懐しているが、六工社でも栄の「富岡風」が生かされることになった。英らが言うのも無理はなかった。当時、六工社の糸は品質が良くないために、「やめておくれよ西条の機械、末は雲助丸はだか」などと言われ、工女は「ぶた、ぶた」と呼ばれ馬鹿にされていたという。英がこうした雰囲気にも我慢がならなかったのは当然である。何とかして、「富岡風」によって六工社を世界水準にまでもっていきたいというのが英らの願いであった。富岡製糸場は国家的維新を示すために資本金20万円を投じている。資産度外視でとにかく模範工女を育てるために建設されたが六工社はそうはいかなかった。総資本2千円富岡の百分の一である。繭も不足し一年中とる量も確保できない。装備も天と地の差ある。賃引きしなければやっていけない。六工社の初売り込みに漕ぎつけるには並々ならぬ努力が必要であった。

六工社の蒸気糸が国際的に評価されたとき、英の喜びはひとしおではなかった。その様子を英はこう述べている。「母も私も生きかえったような心持が致しまして、口も結ばれぬ位喜ばしく感じましたが、何を申すも売り込めぬ先は口に出すわけには参りませぬ。殊に煮てとらせてくれと申された時、大里夫人がとられた時、私が先にたって立派なことを申して強情を張りましたことでありますから、実に実に嬉しく言葉に尽されませぬ」²²⁾西洋技術がいかに大きかったかは英らの行動によって証明できる。それも二十歳前後の娘達である。その気概はどこからくるか。国家的独立が富の形成によって達成できるという強い信念がそうさせたに相違ない。当時の西洋技術の衝撃がこうした形で日本資本主義形成の基底になっているかを垣間見る思いであるが、基本的には今も昔も変わっていないのではないかと考えさせられる。

『富岡後記』は「売り込み後の六工社」で終わっている。そのなかで英は、「六工社とさえ申せば生糸では並ぶものないと人々に思われるようになりました。あたかも旭の昇るがごとき有様でありました。僅か半年も立たぬ内にかくまで相変ずのものかと、ただ驚きの外はありませぬ」²³⁾「富岡風」の勝利であった。西洋列強を目の当たりにして一介のうら若き和田英の行動をとおして近代日本のスタートを垣間見てきたが、当時の日本の置かれた立場がよく分かる。『富岡日記』は次の言葉で締めくくっている。「この上ともますます勉強して製糸場の隆盛になりますよう、また二つには富岡製糸場の御名を揚げたいと日夜念じて居りました」²⁴⁾。英が栄

光の日々をこう述懐したのは大正2（1912）年であるから40年前のことである。今から130年前、英の回顧から90年前である。下火になったとはいえ、グローバル・スタンダードが完全に消滅したわけではない今日、状況は少しも変わってはいない。英の苦悩はそのまま現代日本の苦悩でもある。

五. 和田英『富岡日記』の遺産

『富岡日記』は、明治新政府が西洋列強と伍していくために生糸生産による国力増進を西洋技術によって外貨の獲得を狙ったものであるが、その様子を模範工女の育成、短期間の技術習得、技術の全国展開などを一工女としての貴重な記録である。和田英は一年四ヶ月という短い期間にもかかわらず、一工女としての視点からその様子を丹念に記録している。『富岡日記』は「前記」と「後記」に分かれているが、「前記」は伝習生として、「後記」は技術者としての記録であるが、どちらも国家的視点から展開され、とても二十歳前の工女とは思えない。裏を返せば、近代日本の出発がいかに国家的敵独立が急務であり、世界に伍していかなければならなかったの現れであると考えていいであろう。和田英の筆は率直にそのことを全編で伝えている。

松代からの一行は16名であったから、外にも記録があってもいいはずであるが、他は一般に言われているように「物言わぬ民²⁵⁾」であった。英がこれほどまでに国家的使命を持ったのは英のエートスがそうさせたと見た方がいい。それは儒教的な視点から考えることができる。松代には佐久間象山がいる。「東洋道徳」というよりは「西洋芸（技）術」に力点をおく佐久間象山型と見ることも出来ようだが、²⁶⁾どちらかと言えば、英の精神構造は横井小楠の「堯瞬孔子の道・西洋器械の術」に²⁷⁾近いかもしれない。英の家庭に原因がありそうである。そこで最後に、松代藩の藩風、英のエートスを『富岡日記』、『我が母の躰』から見ておこう。

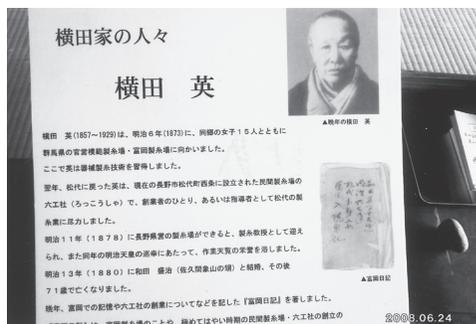
先ず松代の藩風である。松代に文武学校がある。これは水戸の弘道館を見習って造ったものである。藤田東湖などの助言によったものと言われている、とすれば松代藩も正名論は受け継いでいるが、攘夷論は西洋芸術に取って代わられる。佐久間象山（1811-1864）を輩出した松代藩は中興の祖と唱われた真田幸弘（1740-1815）に始まる。この時期恩田木工民親（1717-1762）も活躍する。『日暮綴り』で有名な恩田民親はけっして「嘘を言わず」、「音物は受け取らず」、「質素儉約」を藩の礎に据えることを藩風とした。²⁸⁾英の母きよがご先祖様に申し訳が立たない強調するのは恩田木工民親の意志を継いでるのかもしれない。幸弘は江戸の儒者を招聘し文学館で儒学を奨励した。とくに菊池南陽を招き学問を奨励したことが松代に儒学が盛んになる要因を造ったことになる。こうした精神風土の中から松代三山が輩出する。鎌原桐山（1774-1852）、山寺常山（1807-1878）、佐久間象山である。こうした学者らは江戸の儒者と関係を持ち佐久間を会して佐藤一斎（1772-1718）などと交流するきっかけとなった。真田幸貫（1791-1852）は藩士の子弟に四書五経を学ばせ学問の奨励はもとより武の方も奨励し華美に流れる風習を一新した。幸貫は水戸の弘道館に習って藩校文武学校を創設英才の教育に志した。²⁹⁾とくに文武学校は西洋芸術にも力を入れ、佐久間象山がそうした雰囲気の中からも育ったとしても不

思議ではない。九郎左衛門、きよ、数馬、英らがこうした松代の藩風によって培われたものと考えていいであろう。富国強兵と横田の悲劇はそうした雰囲気の中で育ち挫折したが、それこそが英が富岡で活躍し六工社で国際的視野に立ち奮闘した理由ではなからうか。

富国の道を一介の乙女がこれまでに真剣に受け止めなばならなかったのは、叔父横田九郎左衛門、機応の悲劇が原因である。この事をぬきに『富岡日記』は読めない。九郎左衛門は松代の富国策を実行、成功しそうになったとき、徳川の壁が立ちはだかった。その後、学の道を志すも志半ばで病に倒れ、英が慟哭にもにたかたちでしるしているのは横田家の悲劇があったからであり、これが分からないでは『富岡日記』の真相は語れない。横井小楠とともに英が徳川を恨んだことは言うまでもない。九郎左衛門の精神と新政府の富国への道が重なる。英の躰はけっして徳川の道徳ではない。むしろ逆であろう。九郎左衛門が果たせなかった夢を追い求めての糸取りと考えていい。横田家に伝わる松代の藩風である儒教精神である。徳川の儒教ではない。孝や礼を中心とする純粋な儒教である。英が口癖のように強調している「そんなことしてはご先祖様に申し訳が立たない」の精神である。「恥ずかしいとは思わぬか」が母の口癖であった。英もこの点を踏襲している。横田家の伝統は儒教の経典『大学』や『小学』にのっとた人の踏み行う道であった。³¹⁾英が「本心」を強調し、さらに「心こそ心迷わず心なれここに心心ゆすな」という歌を口ずさむが、これが横田家の伝統であった。ここには徳川の伝統、武士支配による秩序付けという発想はない。儒教倫理・道徳、人として踏み行うべき道が英の踏み行うべき道でもあったと言えよう。徳を備えた開発論、富国論であった。東洋道徳である。ここに『富岡日記』の真意があるし、アヘン戦争をしかけてくる西洋合理主義と一線を画す精神があると言えよう。

東洋道徳の方が上になっている。富岡製糸場のあり方もこの事を抜きにしては語れない。植民地戦争をしかけてくる西洋列強の経済合理主義を東洋道徳で受け止め消化していく、少なくとも富岡製糸場の当初の存在はここにあって見るべきであろう。だが、近代日本は富国強兵を歪んだ形として展開してしまう。西洋列強の脅威に怯え、英が目指した富国策とは似ても似つかぬ方向へと歩み出してしまった。普遍主義や公共の道からそれ、富国が強兵のために手段化、近代日本は横田九郎左衛門の悲劇の道を強兵に深入りしすぎ、取り返しのつかない悲劇を体験することになる。これこそ真の悲劇、英が生きていればそう叫んだであろう。

横井小楠に言わせれば、あれほど強調した強兵の道は取るべきではない、と叫んだにも関わらず、後期水戸学の強兵の道を実践したことになる。渋沢栄一、尾高惇忠らがいち早く放棄した道である。由利財政は大熊財政さらに松方財政に代わるに及んで、強兵路線が鮮明になっていく。その遺物の代表的な一つに韓国・ソウルの西大門刑務所歴史館がある。富国とは裏腹、強兵の爪痕が生々しく訴えている。天安の独立記念館よりも衝撃は隠せない。日本の近代化論が内包している矛盾を考えると、韓国の近代化がいかになされたかを垣間見るとき非常にき



晩年の横田 英

ついものになっていることは否めない。西大門刑務所歴史館はそのことを暗黙のうちに訴えているように思えてならない。英の富国強兵論の裏面と考えていいであろう。

今日、せめて近代日本は和田英のところまでおりて来る必要がある、と強く感じないわけにはいかない。すでに、横井小楠は「権変功利」の術は避けるべきである、とペリー直前の嘉永6年正月の段階で強調している。武に偏ることを戒めるためであった。権変や功利では仁義の大道を貫くことができない、と考えたからに外ならない。つまり、天地には大道がある。ペリーの来航に際し「権変功利」では通用しない、武や小賢しい智恵に陥らないよう働きかけたわけである。半年後、海外との対応については、さらに具体的に展開し、無道の国として振舞ってはならない旨を強調した。有道の国として振舞わなければならないと説いた³²⁾。有道の国が天地の大道にあることは言うまでもない。英の富国強兵論もこの点にあると見ねばなるまい。『富岡日記』は英が明治40年頃書いたものである。17才当時較べ考えも、環境も随分変化している。充実期に書かれた見れば『富岡日記』の英の思想を17才当時と同レベルで見なすことは出来ない。『富岡日記』をそうした視点を踏まえて読むと非常に説得力がある。とくに本稿で強調した九郎左衛門と横田の悲劇は、『富岡日記』のキーワードになっている。ここ抜きにして和田英の思想も『富岡日記』の真意をも正確に読み取ることは出来ない。

（やまざき ますきち・高崎経済大学名誉教授）

〔注〕

- 1) 拙著『日本近代化をになった女性達－製糸工女のエートス』日本経済評論社、2003年、参照。
- 2) 渋沢栄一、尾高惇忠誕生の地を何度も尋ね、また横井小楠との関係で後期水戸学に本格的に足を踏み入れなかったのは怠慢であったという外はない。
- 3) 名越時正『水戸学集成 水戸学の研究』1975年、国書刊行会、参照。
- 4) 横井小楠『沼山対話』「横井小楠関係史料 I」東京大学出版会、1989年、参照。
- 5) 横井小楠『沼山対話』前掲書、参照。
- 6) 誠が儒教のキーワードになっていることは論またない。この点は、『中庸』の「誠は天の道也。之を誠にする人の道也」を上げれば充分であろう。
- 7) この点については、坂本慎一「草莽の後期水戸学としての渋沢栄一思想」（川口浩編『日本の経済思想－19世紀の企業者・制作者・知識人』所収、2004、日本経済評論社）参照。
- 8) この点については『大学』参照。さらに拙著『経済倫理学叙説』日本経済評論社1987年、参照。
- 9) 和田正俊『和田英の伯母さんの思い出』（和田英『富岡日記』講談社所収）1973年、154頁。
- 10) 前掲書、153頁。
- 11) 前掲書、154頁。
- 12) 前掲書、149頁。
- 13) 前掲書、19頁。
- 14) 前掲書、150頁。
- 15) 横井小楠『国是三論』『横井小楠関係史料 I』前掲書、参照。

- 16) 和田英『富岡日記』前掲書, 116-129頁。
- 17) 前掲書, 79頁。
- 18) 前掲書, 87頁。
- 19) 前掲書, 108-114頁。
- 20) 前掲書, 115頁。
- 21) 前掲書, 89頁。
- 22) 前掲書, 146-147頁。
- 23) 前掲書, 149頁。
- 24) 前掲書, 149頁。
- 25) 前掲書, 159頁。隅谷三喜男, 『解説』
- 26) 佐久間象山は『省賢録』のなかで「東洋道徳・西洋芸術」を五つある楽しみの一つに上げている。「西洋芸術」とは「西洋技術」のことである。文武学校が幕末洋学に入れたが西洋芸術は今も松代に残っている。象山の手による大砲, 電信設備はその代表である。
- 27) 横井小楠は慶応3年甥のアメリカ留学に際して「堯舜孔子の道・西洋器械の術」なる言葉を贈った。これには続きがある。「何ぞ富国に止まらん, 何ぞ強兵に止まらん, 四海に大義を布かんのみ」であるが, よく引き合いに出される佐久間との対比であるが, 佐久間象山が西洋芸術に重きを置くのは幕末維新期の松代の藩風にあったかもしれない。近代日本の流れを垣間見るとき, 横井小楠, 佐久間象山のこの対比は今日まで影響を与えているように思えてならない。もちろん富岡製糸場についても例外ではない
- 28) 恩田民親は馬場杉羽の書とされる『日暮硯』によって藩財政を建て直したと言われている。この他, 「年貢の督促の廃止」, 「足軽たちの酒食金品強要の弊除去」, 「年貢納入の月賦制」, 「先納御用金の申しつけの廃止」などの実践。その遺徳は松代の藩風として受け継がれていると見ていい。横田家や和田家もけっして例外ではない。
- 29) 信濃毎日新聞社編『松代-歴史と文化』1985年, 参照。
- 30) 和田英『我母之躰』信州大学教育学部付属長野中学校編, 信濃教育出版会, 1996年。『富岡日記』所収。
- 31) 和田英, 前掲書『富岡日記』125頁。
- 32) 横井小楠『文武一途の説』(嘉永5年, 1852年) 参照。
- 33) 横井小楠『夷虜応接大意』(嘉永6年, 1853年) 参照。